

研究プロジェクト・論文

戦前生まれの女性の暮らし

生 井 知 子

学芸学部・日本語日本文学科

は じ め に

ここ何年か、私は「日本文学と女性」という講義を担当し、受講生に、第二次世界大戦前に生まれた女性にインタビューをするという課題を課している。

目的は、① もはや戦後五十年以上が経ち、学生も一九八〇年代生まれの世代になっており、第二次世界大戦以前の日本がどのような社会であるか、実感として分からなくなっているの、少しでも生の証言を聞かせ、理解の助けとしたい。② 人生の大先輩の生き方を直接聞く事によって、学生自身に自らの生き方を考えさせたい。③ 様々な女性の人生の記録を後世に残したい。という三点である。

私が出した指示は、「自分の祖母・近所のお婆さんなど、第二次世界大戦の終了以前に生まれた女性（出来れば明治・大正生まれが望ましい）にインタビューをすること。① いつ、どこで生まれたか？ ② 家の職業は何か？ ③ 家族構成は？ ④ 学歴は？ ⑤ 職歴は？ ⑥ 結婚は？ といった基本的な事項は必ず聞くこと。ただし、相手が隠したがっていることについては、あまり追及せず、プライバシーを尊重すること。それらを踏まえた上で、暮らしはどんなふうだったか？ どんな女性差別があったか？ など、相手に合わせて、生の証言を色々と聞くように」ということであった。また、「今日ま

で残されている写真などで表面の服装は分かりやすいが、どんな下着を着ていたか、生理の時はどうしていたかなど、当事者でなくては分からない事なるべく聞いておくように」という指示も出した。

なお、「インタビュー結果をまとめたレポートを公表することについて、インタビュー相手に、① 実名のままで公表しても構わない。② 実名を伏せてなら公表しても構わない。③ 公表されては困る。のいずれかを確認しておくように」との指示も出した。

さて、集まったレポートは、いずれも力作揃いで、それぞれの女性の生き様をずしりと感じさせ、生の証言の重みに満ちていた。御本人の希望で、公表出来ないものも多いが、公表を許可して下さったものについては、出来る限り、オープンにしていきたいと考えている。二〇〇四年度には、DWC-CyberVine 上で受講生に対してレポートを公表するという試みも行った。

ただし DWC-CyberVine の利用は受講生に限られ、現状では、大勢のインタビュー結果を一挙に一般公開する事は物理的に困難なので、今回は、二〇〇二年度春学期の受講生のレポートの中から、幾つかの証言を御紹介したいと思う。いずれのインタビューも二〇〇二年春から夏にかけて行われたものである。

なお、学生のレポートの中の明らかな誤字・誤記は適宜訂正し、表記なども統一した。またプライバシー保護のため、必要に応じて人名等に手を加えた。紙数の都合で、全部を載せる事は出来なかったこともお断りしておく。

まず最初に御紹介するのは、三船舞さんのレポートで、明治四十一年九月に兵庫県加西市鎮岩町の農村部で生まれた A さんについてのものである。

A さんは、村会議員で役所に勤めていた父、母、七歳年上の姉、五歳年上の兄、そして自分の五人家族で、末っ子だったという。家業は農業だった。

A さんの学校生活は《賀茂尋常高等小学校、小学校六年（義務だった）と高小二年の計八年を卒業しています。その後、裁縫学校に四年行きました。三年と補修一年の学校だったそうです。習い事は何もしなかったということです。

尋常高等小学校は、一、二、三月生まれの人は七歳、普通は八歳から入学だったようです。A さんは九月生まれのため八歳から行きました。

人数は男女共学で一クラスに五十人弱と多く、また女子の方が、三十人と男子より多かったらしいです。しかし、高等小学校の方まで進んだ人は少なかったらしく、一クラスから五〜七人くらいだったようです。一学年全部で三十人くらいしかいなかったもので、急に友達が減って寂しい思いをしたそうです。

学校へは徒歩通学。片道四キロあったらしく、草が伸びている砂利道を歩いていったらしいです。足にはわら草履。専門に売りに来る人もいたようです。それを買ったり、もしくは家族に作ってもらったりしていて、新しいものを下ろしてもらった日以外はいつ破れるか分からないので、一足は腰の帯に引っ掛けて予備として学校に持って行っていったそうです。

学校の帰りにはよく母の姉に、ぜにあられ（餅米と米が半々で作ったあられ）とかをもらいに寄っていたらしく、それがおやつ、という日もあったとか。「あの頃は、一銭あったらちっちゃい飴が十個ほど買えた」というので、そういうものをおやつにしていたらしいです。直径一センチくらいの飴だったようです。

学校の服装は、おこしという三尺三寸位の正方形のネルの布の上に着物と二十センチくらいの帯と、その上に前垂れで、寒かったら着物の上に羽織を羽織る、というもの。決まった着物などは無く、各自好きな格好だったらしいですが、着るものも少ない時代だったので、皆同じような服装だったらしいです。おこしの上から長襦袢を着たこともあったようですが、何歳の頃は覚えてないそうです。普通はおこしの上に着物でした。

そんな格好で行っていたので、学校から帰ってもあまり着替えるという事は無く、そのまま同じ格好で田畑の手伝いに出たりなどしていたようです。新しいものを着ているときなどは、悪い着物と替えることもあったようです。一度、母親が縫ってくれた新品の前垂れをして行ったのに、筆（書道）の時間に墨汁をこぼしてしまって、真っ黒になってしまい、すごく困った事があったらしいです。

免状式や天長節、紀元節など、式には着物の上に袴をはいての出席でした。そのときには、学校からミカンなどのお菓子が貰えていたらしいです。「それがえらい嬉しかった」と言っていました。また、裁縫学校には四年間ずっと袴で行ったらしいです。

学校には田植休みなど、家を手伝うようにという公認の休みが存在していました。

教科書は、風呂敷に包んで肩から斜めにかけて胸の前で結んでいたもので、走ると教科書が落ちたりして、道の真ん中にしゃがみ込んで包みなおしたらしいです。今と違い車などは走っていなかったので、道の真ん中でも充分安全で、精々学校へ急いでいる子とぶつかったりしたくらい的事がある程度だったそうです。なぜ真ん中かと聞くと、道の脇によけると、何が出てくるかわからないという怖さもあったので、堂々と道の真ん中にしゃがんで包み直していた、とか。

先生の格好は、女は着物に袴、寒ければ羽織。男の人は、裁縫学校を卒業する頃には、洋服になっていたようです。洋服といっても、カッ

ターシャツだったようですが。》

Aさんの結婚は昭和初年で《裁縫学校を出て、一年と少し家にいて田圃をしていた後、二十二歳で結婚しました。因みに、お姉さんの方は二十歳だったそうです。お見合い結婚かと訊ねたところ、その頃はそんなものは名前だけあった、というようなものだったらしく、本人曰く「村の中やから見合いなんてせんでも顔なんか知っとるさけにせえへん。そんなもん仲人さんが『くれんかー』言うて『ええよ』言うたら仕舞いや」ということです。この頃は村の中同士の結婚は、たいがい仲人さんの橋渡しというか、各家庭に聞いて回ることによって行われていたらしく、皆顔見知りの為こんな風に簡単に済んでしまったらしいです。また、返事は自分がして、親は娘の返事を後で聞く、という形だったらしく、取り敢えずは子供の意思が優先だったようです。「どっちか言うたら恋愛にしときんか」とは本人談。

結婚式は着物。仲人さんは、もちろん聞きに回ってきた人が仲人をしていました。結婚指輪もあったそうで、結構高級だったようです。披露宴が今よりもずっと長く、家で盛大に二、三日なされていたそうです。なぜなのかと思ったら、呼ぶ人の種類が違って、一日目は男で、舅入り（注・嫁入り行列で、嫁の父や兄弟が提灯を下げてついてくること）についてきた人。二日目は女の人ばかりを呼んでおもてなし。これを膝直しと言ったそうです。そして三日目が馴染み客という身近な人々。という具合でした。

結婚した後は新宅に越して住んだため、二人での生活。よく言うような姑さんとの確執とかは無かったらしいです。そして今もこの家に一人で暮らしています。

二十三歳位で娘を出産。しかし、一歳で亡くなりました。「家の裏の坊さんに名前付けてもろたから早よ死んでもた」と言っていました。次も娘を出産。

子育ては自分一人で。夫は全く手伝わなかったようです。

結婚と同時に裁縫学校を出た洋裁の腕を生か

して家でミシンを買い、縫工工場に収めていました。出来上がると工場に持って行っていたそうです。製品はカッターシャツ。十二枚ずつ一ダースで出荷していたそうです。ただし、軍需品であったため、規格がとても厳しかったらしいです。この仕事は、娘が結婚するまで続けました。その後、婿養子が下請けの鉄鋼所を開業し、その仕事に携わりました。機械で、鉄鋼の形を変え部品を作っていく仕事で、指を詰めたりしたこともあったそうです。親指が第一関節の下から飛んだりしたこともあったようで、機械に肉がくっついていたりしたため無事繋ぐことが出来ていましたが、今でも変に曲がってしまっています。》という。

Aさんの服装は《よそ行き服は、着物の質のいいもの。洋服を着だしたのは、裁縫学校を上がってからだそうですが、普段着はやっぱり着物でした。結婚してからも、かなりの間は着物の生活が続いていたようです。ただ、三十六歳の時には夏にはワンピースを着ていたらしいです。四十歳くらいの時には、着物で旅行の待ち合わせ場所に行ったら、四十人くらいのうち自分を含め三人ほどしか着物ではなかったそうで、三人で、旅先で木綿の服を買ったりしたこともあったとか。スカートの下はパンツをはいていたそうです。

寝るときは、寝巻きのワンピース。あっぱっぱという物があつたらしいです。

田圃をするときには、たすき掛けに尻からげといって腰の帯に着物を絡めていたらしいです。その時はおこしが見えてしまったらしいですが、皆見えるときには、赤い系統のおこしをはいていたそうです。

生理の時には月経帯という当てるところがゴムのもので、脱脂綿でまかなっていたそうです。》という。

また《食事は、米と麦を混ぜたものがご飯でしたが、割合は各家庭で様々で、実家の方は「お兄さんが麦が嫌いやったから半々も入れへんかった。炊くのは、同じ釜やけど麦は端っこに寄せて炊いて、お兄さんが食べた後混ぜて食

べよった」ということでした。米：麦が六：四や七：三くらいだったらしく、当時にしては随分贅沢なのでは、と思います。おかずは主に野菜、他に丸干しがあったりしたそうです。そしてお吸い物。これが普通であったと言いました。結婚してからは二人だったので米を食べていました。おかずはあんまり変わらなかったようです。

お風呂は実家の方は金風呂だったので薪をたかなくてよくて、お風呂の中心に四角い加熱機のような物をつるして、暖めていたらしいです。でも触るとすごく熱くやけどした事もあるそうで、子供にはあれは危なかったという事です。他の家は薪をくべていて、新宅も薪くべ式のお風呂だったようです。今と同じで毎日入っていました。電気は、今でいうランプと呼ばれるものしかなく、少し暗かったので危なかったらしいです。

お葬式は喪服。通夜、葬式があるのは今と変わりませんが、火葬ではなく木棺に入れての土葬だったようです。》という。

二

次に御紹介するのは、森寛恵さんのレポートで、明治四十三年四月に岐阜県高山近くの農家の家に生まれたBさんについてのものである。

《Bさんのお母さんはもともと長兄と結婚していたのですが、その方が戦死なされたので、生きて帰ってきた五歳下の弟と再婚したそうです。しかしその弟さんは年上の女房を嫌がり、二人目の子が生まれたあと、かけおちをして姿をくらましたそうです。その二人目の子がBさんで、Bさんは二、三度しか父親と会ったことがないそうです。》

Bさんのお母さんの最初の夫が戦死したのは、日露戦争の際の事だろうか。当時の結婚は家と家とのものだったので、兄が亡くなると弟と再婚する、姉が亡くなると妹と再婚するということは、ごく普通に行われた。私の講義の受講生のレポートの中でも、そういうケースは他にもいくつか見られた。

《それから一人で二人の子を育てたBさんのお母さんは、Bさんが十歳のころに亡くなってしまったそうです。十九の兄と二人きりになったBさんは、とりあえず小学校卒業まで兄といたそうです。小学校五年生の時、親を失いながらしっかり勉強していると表彰されたことがあるそうです。三年生のころからずっと首席だったからだそうで、よっぽど誇らしくて、何度も何度も表彰された紙を読んだのでしょう、文章をまるまる暗記していて、私に聞かせてくれました。小学校を卒業すると、兄は土地も山も財産を全部売ってしまって、芸者呼んで飲んだくれになったそうです。Bさんは助産婦の夢を抱いていたのですが、お蚕さんをしている親戚の家に身をよせることになって、蚕の扱いをそこで学んだそうです。そしてお蚕さんの先生になり、近所のお蚕を預かって繭を引くようになったら返す、ということをしたそうです。頑張り屋だったBさんは十八の頃には一番たくさん生糸をこしらえたとして表彰されました。しかし、二十歳のときに身をよせている親戚のおじさんに迫られたので、家に書き置きを残して最終のバスに乗り、遠い親戚の家に行ったそうです。そこで今後のことを話あったのですが、次の日おじさんが迎えにきたので戻らないわけにもいかず、いったん最初の親戚の家に戻りました。その家には親戚中の人がいて、話し合いが行われたそうです。おじさんの一件は酒の勢いだったから戻ってこいという言葉にBさんは冬の間だけ大阪の平野の紡績工場に勤めたいと願い出ました。その願いは受け入れられ、紡績工場に勤めたそうですが、冬を越してもBさんは家に帰りたくはありませんでした。それを親戚に話すと、朝鮮の朝鮮総督府慶派課長の家の女中さんになることになりました。その家では四、五人の家族に対して八人もの女中さんがおり、皆忙しいのにBさんはびっくりしたそうです。玄関や炊事場、子守りなど仕事は分担されており、一週間周期で変わったそうです。その家では主人たち(Bさんは「内は…」と言っていました)は体にいいからと玄米を食べ、

女中さんは白米を食べたそうです。よくその家の女主人に「私はいつかこの家を出て行くから、その時はあんたもついてきてちょうだいね。」と言われていたそうです。Bさんは「あんなにお金があって回りから見たら不服なんかなさそうなのに、世の中難しい」と思ったそうです。それから金山（朝鮮で一番金が取れるところ）に行くと、そこでは戦争で負傷した人がいっぱいやってきたそうです。手のない人、足のない人…Bさんは懸命に看護し、少ない給料のなかからお金を分けたりしてあげたそうです。ある日憲兵に呼ばれて、何事かといってみると、よく兵士につくしたとして陸軍大臣から感謝状を受けとったそうです。そのことは新聞にも取り上げられました。さて、日本にいるある酒屋の番頭さんがその新聞を見て、「Xさんところ奥さんも亡くなって子どもと父親だけで大変だから、こんな子が来てくれたらいいだろうなあ。」といったそうです。そして朝鮮にいるBさんはそういう縁談話があることをしり、もう親戚のおじさんのところにも跡取りができていたから日本に帰っても大丈夫だと思ったので（その親戚の家に戻るのは絶対に嫌だそうです。）見合いをして結婚したそうです。場所は神戸でした。それから第二次世界大戦が起こったそうなのですが、Bさんは大東亜戦争と私らは言う、と言っていました。その時に軍長を務めたそうです。子どもや老人などがどの防空壕に入ったかとか、火を消している人は何人かを帳面に書いて役所に届けたり、配給されてくる食糧を取ってくるのが仕事だそうです。配給されるのは、米はもちろん塩や醤油などの調味料までであるのだそうです。どんどん状況が悪化すると米がなくなってしまう、米の代わりに砂糖にされた日もあったそうです。でも砂糖ではちゃんと栄養が取れないので、米を作っているところで物々交換をしてもらったそうです。その軍長としての働きは認められ、表彰状が送られたそうですが、日本は結局負けてしまったので新しいお嫁さんにこれを見られると笑われると思ったので破り捨ててしまったそうです。そ

れから空襲で家が焼けてしまったので、出屋敷（阪神尼崎の隣の駅）に越してきたそうです。出屋敷は今あまり人で賑わっていませんが、昔は人で溢れていたそうです。そこで七十二歳を迎えるまで天ぶら屋さんをしたそうです。》

三

羽山美帆さんのレポートは、大正三年十月に長野県小県郡塩川村字坂井で生まれたCさんについてのものである。

Cさんの家族は、祖父、父（長野県師範学校卒の教員）、母、兄（大正二年生まれ）、Cさん、妹（大正六年生まれ）だった。羽山さんは、Cさんの語りの形でレポートをまとめてくれたので、ここでは、その形のまま御紹介したい。

《私は兄と年子で生まれたため、家には子守二人と女中と作男がおり、母はその人たちを相手にいつも大変だったらしい。物心のついた頃にはすでに祖母は亡く、ぢい（祖父）との関わりが深かった。私が生まれるとき、母は庭で蕎麦を叩いており、私は蕎麦のほこりの中で産声をあげたらしかった。難産だった兄は体も弱く、反対にお腹の中にいるときから母の養分をたくさんいただいていた私は、見る見るうちに兄を越すほど大きくなった。「この子はほっておいても大きくなる」と思われていたらしく、風邪一つひかずに成長した。柿が甘くなる頃や葡萄が色づく頃には、私は屋根づたいに木から木へ渡り歩いたものだ。夢のような楽しい思い出である。

私は母の手に余るような子供だった。ぢい（祖父）は私をかばう気持ちがあったのか、あるいは二人の気質が合ったのかは分からないが、私は学校へ入る前は、いつもぢい（祖父）と一緒にいた。冬の寒い日は、ぢい（祖父）のあぐらの上に座って、炬燵から顔だけ出し、ぢい（祖父）が読む本をのぞいたり、眠ったりした。家にいるときの私の履物（草履）も全部ぢい（祖父）が作ってくれた。友だちが大きな履物をばたばたさせていたのをよく覚えている。竹馬、竹笛、髪飾り、リボンタケナガ（上等な髪を結ぶときに使うもので、美

しい花模様がついている) などを持っていた。ぢいやんの引き出しの一つには、私用の色々な玩具が入っており、雨の日などはそれを出して楽しんだ。ぢいやんはそんなときいつも、日本紙を綴った難しい本を読んでいた。ぢいやんは整理整頓の行き届いた人で周りはいつもきちんとしており、私はそこで大きくなったようだ。外で遊んで冷えて帰ってきた私を抱いて、ぢいやんが炬燵で歌ってくれた歌。

「しりあーぶり、かのかんどう（観音堂）しりあーぶり、かのかんどう、かのかんどうへ聞こえて仏どんが驚いて、お供にお檜を担がせて、へーい（塀）の周りを火の用心、火の用心」

私が眠るまで、何度も何度も歌ってくれた。訳が分からないがとても懐かしい。

小学校へ行くようになったとき、私は他の友だちが誰も履いていなかった袴を履いて学校へ通った。袴は擦れるので私も自由にやりたいと思ったが許してもらえず、必ず袴をつけ、下駄を履いて学校へ行った。私の家は門限が厳しかった。友だちと遊びすぎてしまった日、家に帰るともう夕飯時になっていて、門限を守らなかった私は家の中に入れず、石段に腰掛けて、明るい楽しそうな部屋の灯りを眺めながらじっと待ったものだ。おりつさん（女中）が私を呼びに来て、誰もいないお勝手に夕飯を食べた時のことは忘れられない。

夜、母は縫い物をし、私たち三人の子供は勉強をし、同じ電気の下で過ごした。母が前掛けをはずし、きちんとたたんで紐を巻くのを見ると、私たちも勉強を止めて、てんでに寝床に入ったものだ。

私の家の近所には肺病の家というものがあり、その家の子供は青白い顔をして、首には腫れ物ができていた。恐ろしいと思っていたので、その家の前はなるべく通らないようにし、通るときは口や鼻に袖をあて、息をししないで急いで通り過ぎたものだった。小学校三年生の時に、私はトラホームという眼の病気になった。母に連れられて隣村の目医者に行った。家では洗面器も手拭いも別にされて「うつる」という言葉の

悲しさをいやと言うほど味わった。

兄と妹はおとなしくて、家の者に反抗するようなことは無く、ごく普通の子供だった。私は反対で、買ってもらったものを友だちに貸してしまったり、着るものも男の子の様に綻ばしたりして、さんざん母に手をやかせた。父はいつも土曜日に帰って来たのだが、父が帰る日はいつもそわそわして落ち着かなかった。父と母が話しているときに私のことが出ると、何となく嫌な気がした。父が手を見せろと言うので、おそるおそる出すと「ふう、今日はつめぐりの花が無いなあ。」と言って、にこにこするのである。つめぐりの花とは、いたずらをすると手を「つまみ上げられる」ために、紫色になったり黒くなったりする花のことである。父は私が男の子のような遊びをしても決して怒らずににこにこ笑っていた。父は日曜日には必ず、ぢいやんの顔や頭を剃ったり刈ったりしていたものだ。

小学校四年生の時裁縫の時間があり、ズロース（昔は「サルマタ」と言っていた）を緋色のフランネルで作った。この時に、私達から「腰巻」というものが無くなった。ズロースは何だか股に挟まって気持ちが悪かったのだが…それから遊びにゴム飛びが加わった。これは逆立ちをして、高く張った紐を引っかけて越えるものだった。これはズロースをつけていないと出来ない遊びだった。それから間もなくメリヤスという肌着が流行して、私達の着物の歴史は大きく変わった。

私の幼い頃は使用人も多く、年中男が一人家におり、流しの水を離れた井戸から担いで来たり、庭でトッコ（鯉節）を割ったりと、細々したことをしていた。蚕の仕事が多くなると、「ケーヤン」という人が越後から女衆や男衆を連れてきて家の中は活気づき、母はいつも使用人と立ち働いていた。冬になると繭で売れない繭糸を取ったり、おりつさん（女中）と真綿を作ったりしていた。糸は上田の機屋へやって、その代わりに色々な反物が返ってきたようだった。

六年生になったとき、女学校へ行くことが持

ち上がった。私にはふみちゃんという年上の友だちがいたのだが、家が貧しかったので、彼女は卒業するとキカイ（製糸工場）へ行った。母が「親戚はみんな女学校へ行ったから、お前も行きなさい。もし落ちてキカイに行くような恥さらしは家には置かない。」と言った。私は腹の底からため息をついた。兄は上田の中学に入学していたのだが、勉強もしないで遊んでばかりいる私を「落ちるチムニスリーパー」と言って馬鹿にした。私には何のことか分からなかった。「ふーん」と言って、落ちたらふみちゃんとキカイへ行けばいいやと思っていた。女学校の試験には、友だちのおばさんに連れられて行った。母に似たせいか電車で酔って、頭が痛く気持ちも悪い中、何が何だか分からないうちに二日の受験を過ぎてしまい、もうふみちゃんとキカイへ行こうと思っていたら、運良くパスしてしまった。上田から女学校三年生のキョちゃんが来てくれて、二人で上田へ行き、本、手帳、ズロース下着、靴下、鞆など夢にも見たことが無いものばかり買った。小学校へは五分もあれば行けたのに、女学校へは三十分も坂道やたんぼ道を歩いて電車に乗らなければならなかった。電車の中には酔っぱらいはいるし、先生は難しいことばかり言っているし、田舎者の私には友だちの言葉遣いも慣れなくて、キカイへ行った方がよかったとさえ思った。

車酔いもだんだんと治り、周りの人達にもやっと慣れたと思った頃、着物から学校の制服を着るようになった。着物から洋服になったのである。何とも言えない気持ちだったが、みんなが平気な顔をしているので、私もそう装った。

夏休みの時にメンスがあった。足をいくらつぼめてもつぼめても止めどなくしみ出る異様なものに私は慌てた。それこそ、天地がひっくり返ったような気持ちだった。母は「誰にもあるものだから…」と言ったきり。夕方父が上田から、ピクトリアという美しい缶に入った月経帯と脱脂綿とガーゼとちり紙を買ってきてくれた。考えても分からず、やり方も暗中模索。夏休み中でよかったと思った。汚れ物を干すにも、以

前とは違った気配りが必要になった。上田高女の生徒らしく、女らしく…私の生活はこの時を境に大きく変わった。もう子供ではないのだと思い、女学生らしく、女らしくを心に決めた。昔が懐かしい。ズロースの無かったころが。仮面をかぶった私が始まったような気がした。友だちとは、どんなに仲のよい子でもメンスについては話さなかった。お互いに知らんぷりしていた。メンスだけは「子無し」の報いか六十五歳までずっとお付き合いしなければならなかった。

お小遣いは小さいときから質素にしつけられていたが、必要なものは母が買ってくれたので不自由はなかった。

妹も私が四年生の時に女学校の一年生になった。私が卒業する頃に父に相談すると、母と一緒に百姓をやり、裁縫も母から教えてもらってお嫁に行くように、と言われた。だが母からは「こんな生意気娘に裁縫など教えられない。」と断られてしまった。私の家に奉公していた娘たちも、みなそれぞれに母から裁縫やそのほか色々なものをしつけられてお嫁に行っていたのである。父は笑いながら、それでは仕方がないからまた学校へ行って裁縫を教えてもらいなさい、と言った。そのため私は女学校にある「花嫁学校専攻科」へ入学することになった。通っているうちに、この専攻科を卒業すると高校の裁縫の先生にもなれるし、小学校の先生にもなれるということが分かった。両方の免状がもらえ、先輩たちの多くも先生になっていた。私も父をまねたわけでもないのだが先生になった。卒業後、小県郡和村小学校に就職したのである。この村は南向きの高台にあり、小諸市とあまり離れておらず、自然は雄大で、私はここに六年間の独身生活を満喫したのだった。私の青春はこの和村と芭蕉と短歌で満ちていた。暇はあるし、お金もまあまあだし、友人（学校の先生に限られたが）はインテリだし、思う存分羽を伸ばしたものである。「あたたかき光はあれど野に満ちる香りも知らず浅くのみ春はかすみて夢の色わずかに青し」口ずさむとあの頃を思い出

十月十日、和村小学校の校庭運動会で私は真っ黒に日焼けした。そして十五日に八幡村へ嫁に来たのである。それからの私の生活は、土曜日の夕方には八幡村へ帰り、日曜日の夕方にはまた和村へ戻るというものだった。昭和十五年春には、私は更級郡更級村小学校へ転勤になった。生活も変わり、人も変わり、和村小学校へは歩いて十分もかからなかったのだが、更級村小学校へは三十分以上歩き、そのうえバスに乗らなければ行けなかった。世の中も厳しい戦争へと巻き込まれていく中で身も心もすり減らし、考える間もなく妊娠、そして早産…結核にもかかった。父が教員結核療養所に見舞いに来てくれたが、私は一言もしゃべれず下を向いて涙を流してばかりいた。父は帰るとすぐに長い手紙をくれた。親しいお医者さまに聞いたが、その療養所に入れて幸運だった、まだ初期のこ

今回の受講生のインタビュー相手は、明治末から昭和初期の生まれの方ばかりなので、初潮

先とを深中御門なる者蒙愛界供人贈す必は方の込申御て見と告賣所

品一號
型一號
(入大)

品二號
型二號
(入大)

色白 特口

純真子製衛生用品所

御婦人方が

衛生に「經快」簡便なる……
ビクトリア月経帶を御使用
遊ばす時は新春の微熱したる
氣分を一層強く感じ得たる幸
が出来ませう。

内袋長寸 十二釐
清乾原料 四十五釐

月經帶

ビクトリア月経帶現在、最も安
るゴム製にして、動靜共に使
る由の巾着にて、「コレ」にお用
ひなされたいと思ふ方には、
「コレ」の水があらぬやうに作
成してあり、その爲めに、
（この點）にて、久しく衛生に
關する弊害に於いて、無類不
潔なり。

◎定價

- 一號品 金五拾圓
- 二號品 金七拾圓

あし！
藥店小間物店に

外運賃のものあり
二號品 金三拾圓

大正 12 年 11 月「婦人世界」掲載広告

を迎えるのは早くても大正終わり頃ということになり、すでにこうした国産の月経帯を手に入れやすくなった時期である。それでも第二次世界大戦の際の物資不足などもあり、月経の際の苦労はなかなかのものだった。

たとえば三宅広子さんのレポートによると、祖母の三宅シズエさん（昭和二年十一月、大阪市生まれ）は、昭和十六年頃の話として、月経の際、《脱脂綿をおしめで包み、そのおしめをふんどしのように身に着けて腰のあたりでひもでつつた上に黒いズロースをはいていたという。これを汚れたら取り替えるのだが、現在のように容易にはいかず、大変時間がかかるので月経の時はトイレに行くのがおっくうで、限界まで我慢したりしていたらしい。また、ひもできつく留めていてもすぐにゆるんでしまうので、ふとんを汚してしまうこともしばしばあったらしく、シーツの下に油紙を敷いてふとんが汚れるのを防いでいたようだ。》という。

佐野友美さんのレポートによると、Yさん（昭和四年十二月、京都市上京区生まれ）は、女学校時代、《生理用のパンツを型紙から自分で作っていたそうだ。今日のパンツは、前と後と底の部分の三つの布を縫い合わせることで出来ているが、当時は、その前後の布を縫い合わせるのではなく、ボタンでつなぎ、底の部分には薬局で売っていた板状のゴムを買ってきてボタンで固定させた。しかし、そのゴムは使い捨てではなく、汚れても何度も洗って使っていたから、どんどん固くなっていき、吸収力が低下して、少し姿勢を変えただけで、ひどい横モレがするので、洋服をかなり汚して恥ずかしい思いをした人が多かったようである。》という。

大西智子さんの祖母の石本ヨリ子さん（昭和三年十一月、愛媛県宇摩郡土居町生まれ）のように、タンポンのようなものを使っていたという例もあった。

他の例で見ても、今日より初潮の年齢がかなり遅く、十六歳、十七歳などというケースも見られた。また性教育というものがほとんどなされておらず、生理については恥ずかしいことと

いう気持ちが強く、それについては友達とも話をしなかったという証言が多く見られたことを付け加えておきたい。

ちなみに、「たけくらべ」の結末部において美登利に起こる「憂く恥かしく、つゝましき事」は、初潮か、初店かという議論があるが、こうした明治期の女性の生理の実体について考えれば、初潮以外の答えはあり得ないと思う。

四

次は、今池衣里さんのレポートで、大正十年十二月に奈良県御所市掖上で生まれたDさんについてのものである。

家族は、父、母、六人の兄、末っ子がDさんで、お手伝いさんもいたという。家は、ニカワ製造工場を経営していた。Dさんは一人娘だったので、欲しい物は何でも与えられて、お手伝いさんに学校の送り迎えをしてもらっていた。服などはデパートで買っており、代金は月末にまとめて払っていたそうだ。Dさんは桜井高等女学校を卒業、大阪上本町の近鉄百貨店で働いていたという。

今池さんのレポートは、戦前の暮らしについての証言が詳しいので、ここに御紹介する。

《現代の台所には、電気・水道・ガスの設備は当たり前だが、戦前はガスの役目をする囲炉裏やかまどがあり、飲み水は家の庭に掘ってある井戸からくんでいたらしい。くんできた水は、水がめに貯蔵しておいた。夏には、この井戸にスイカをつるし冷やして食べたそうだ。

味噌は、自分の家で作り、一年分を一度に仕込んだ。また、漬け物も家で作り、焼き物のかめがたくさんあったらしい。

かまどは、クドとも呼ばれていて、煉瓦で周囲を囲み、一方に焚き口をつけ、上に鍋や釜を置き、食べ物の煮炊きに使ったそうで、Dさんの家には、焚き口がたくさんある大きなかまどがあったそうだ。かまどの周りには、薪の火を途中で消してできる消し炭を入れる火消つぼがあって、新しく火をおこすときには、まずこの消し炭に火をつけてから炭を使ったようだ。か

まどは、すえつけられていて動かせないが、持ち運びのできる七輪が大変便利だったそうだ。燃料は炭の他に、炭の粉を丸めたタドンもあり、火力は炭より弱いので、ゆっくりと煮る料理に便利だったようでお正月のおせちを作る時には大いに活躍したそうだ。同じように、炭の粉を円筒形に固めて空気の通る穴を開けた練炭は、長時間火持ちがしたので、火鉢や暖房用のストーブにも使われたようだ。

かまどがあった裏口の近くに蔵があって、この蔵に大切なものをしまい、火災や盗難から守ったそうだ。

囲炉裏は、炊事、暖房、照明の三つの役目をもっていて、一家団欒の場所にもなったらしい。囲炉裏の回りには、水屋（今でいう食器棚）、飯櫃畚（おひつ）などがあったらしい。そして、食事はちゃぶ台を囲んで、家族そろってするわけだが、Dさんの父のおかずは他の家族より一品多く、父が食べ始めないと家族は食べ始められなかったそうだ。今はどこの家にもある冷蔵庫は、電気ではなく、氷の冷蔵庫で、木製の箱の内側にブリキ板を張り、上段と下段を分ける仕切りがあって、上段に氷を入れて中を冷やし、下段に食物を入れた。その氷は夏になると毎朝荷車やリヤカーを引いた水屋が家々を回って、大きな鋸で威勢よく一貫目、二貫目とか角切りにして届けたようだ。

風呂については、五右衛門風呂で大きな鍋のようなものに水を入れ、薪で炊き、入る順番は、家長である父が入り、女が一番最後だった。それは、男は女より偉く女が先に入ると水が汚れるという理由からきているとのことだった。風呂のない家は、もらい風呂といって、近所で風呂のある家で入れさせてもらったらしい。

便所については、家の隅にありあの世への通路と考えられ聖なる場所として廁神を祭っていた。廁神とは、女性で美人の神様で妊婦が便所の掃除をよくすると、綺麗なよい子が生まれるという言い伝えがあったらしい。

暖房器具については、火鉢があり囲炉裏と違って煙が出ないので座敷で使ったようだ。こ

の火鉢は、現在使われているエアコンのように、部屋全体を暖めるだけの火力はなく、せいぜい手先を暖める程度だったらしい。この上で湯を沸かしたり、お餅を焼いたりしたらしい。必要のない夏は、片づけておける便利な家具だった。ストーブが出てくるまでは使っていたとのこと。また、Dさんの家は戸や障子が多く、冬はとても寒く今のような暖かい羽毛布団や電気毛布もなかった。布団というと、女が手作りをして、湯たんぽを入れて暖めていた。湯たんぽは、金属製で中に熱湯を入れて栓をして、やけどをしないように布でくるんで布団の間にに入れて使っていたらしい。

夏の夜、寝る時に蚊に刺されないために蚊帳というものを部屋につけて寝た。その蚊帳は麻でできていて、雷が鳴ったらオヘソをおさえて蚊帳の中に隠れたと言っていた。

家の掃除は、はたきを使って棚や障子のホコリを取り、板の間や畳はホウキではき、その後雑巾がけをするのが基本らしい。ホウキは、座敷用・土間用・庭用と別々のホウキを使っていた。ホウキには、ホウキの神様がいてお産の時には産室にホウキを立て、妊婦のお腹をなでたりして安産を祈った。このことから女の子は、ホウキをまたぐとお嫁に行けないという迷信も生まれたらしい。

雑巾は、使いふるした木綿を夜なべ仕事で縫い合わせて作り、板の間や廊下は水で絞った濡れ雑巾でふいてから糠を袋に入れた糠雑巾、油をしみこませた油雑巾を使ってツヤ出しをした。畳は、毎日ふくと傷むので丁寧にたたく絞った雑巾でたまに拭くようにしていた。》

Dさんの結婚は、お見合いで二十三歳の時であった。昭和十九年四月のことだ。

《相手の母がDさんのことを気に入って、結婚をさせたらしくて、結婚式まで、数回しか会わなかったそうだ。結婚式は家で行い、親戚や近所の人を呼んで盛大に祝ったらしい。戦争中であつたので新婚旅行には行かなかったようである。結婚式の後、夫は戦争に行ったそうだ。

お嫁入りの時に、長持に嫁入り道具（布団な

ど)を入れて持っていった。また、桐の簞笥、茶簞笥なども嫁入り道具としてもっていった。

お産については、今は病院で出産するのが普通だが、Dさんの時代は家で産婆さんにきてもらって出産したようだ。産めよ、増やせよの時代で、特に家の働き手となる男児が産まれると家の跡継ぎとして、大切にされたそう。また、子供ができてから籍を入れる足入れ婚であったらしい。女は子孫を増やすことが大切な仕事であって、子供ができない時には、実家へもどされて離婚させられたこともあったそう。現在の働いている女の人は、産休をとるが、Dさんの時代には妊婦は、出産ギリギリまで働いた。また、産後まもなく家事をし、仕事場へも復帰した。Dさんの初めての子供は昭和二十年五月に生まれた。もうすぐ戦争が終わる頃だったらしい。

戦争中には食料が不足していて、近所に住んでいた出産まもない女の人は母乳が出なかったらしい。Dさんの場合は、家の庭に防空壕があって、そこに食料をたくわえていたのでこまらなかつたようだ。長女を出産した数年後に夫が満州から帰ってきたそう。

その頃は、夫の両親、妹と同居していて姑とはうまくいわずに、夫と長女と三人でDさんの実家にある奈良県御所市に転居してきたらしい。》

五

新居潤子さんのレポートは 大正十三年六月に兵庫県神戸市灘区新在家で自転車小売業を営んでいた父母の七人姉妹の四女として生まれたEさんについてのものである。

《小学校に行くまでにまず三女が三才のときに法事で父親と親類宅へ訪ねた際に内緒で出されたカキ氷が原因で疫痢にかかり死亡。続いて次女が結核発病。Eさんは彼女の部屋には入らせてもらえなかつたそう。後に死亡。突然父親が満州で一旗挙げてくると言い残し、単身で満州に渡り、残された家族は母親の実家である造り酒屋の敷地内にある離れで生活することに

なるが、しばらくすると五女も次女のが感染したのか結核発病、最後は腹膜炎から脳膜炎で死亡。「頭が痛いって言ってたのが忘れられへんのよ。」と今でも兄弟が死んだときのことは涙を浮かべながら話していた。一年もたたないうちに叔母が大阪へ出かけ、何気なく入った喫茶店で働いている父親を発見。派手に送り出されたものの、いざ行ってみると肌に合わず、かといって帰るわけにもいかず…というわけで大阪で働いていたのだそう。その場で叔母に連れ帰られ、西宮市で再び自転車業につくが、あまり商売にならなかつたため、母親の実家に戻り、技術者の腕を買われて日本造機に入社。Eさんは近くの西郷小学校に通い、小学校の頃は、普通にスカートやシャツを着て、ズック靴をはいていたそう。西郷小学校とは、当時金持ちの子供たちがわざわざ遠くからでも女中を連れて通ってくるような小学校だったらしいが、Eさんは家がただ校区だったから通っていた。毎日登山する人の多い摩耶山には友達同士でよく登りに行ったが、隣の六甲山には絶対に子供だけでは行くなときつく言われていたらしい。「普段は誰も食べたがらない酸っぱい夏みかんを持って行ったんやけど、だんだん頂上になってくるとみんな咽喉が渇くでしょ、子供やからお金なんか持ってへんし、みんなで夏みかんわけて食べるんやけどそれがほんまにおいしかった。」のだそう。こづかいはいくらか忘れたそうだが、一日一回「おやつ買いに行く。」と言ったらいくらもらえて、近所の駄菓子屋で飴、スルメ、クッキーのようなものなどを買って食べていた。ごちそうといえば、やはり母親の作ってくれたバラ寿司、すきやきだったそう。夏はお風呂に入った後、どこの家の前にも長い椅子が置いてあって、夕涼みに出て近所の人々と話をしたり、子供たちは缶けりや花火をしてから寝たのだそう。はじめてキリスト教に触れたのもこの頃で、お菓子をくれるから友達に誘われて教会へ行くと、お話をされ、お菓子をもらったらしい。そして青谷にある神港女子工業学校(現在の成徳学園)に

入るのだが、当時学校の周辺には報徳商業という男子校があったため、彼らと同じ道を通ってはいけないという規則があり、通学路がきっちり分けられていたのだそう。高校二年生のときに阪神風水害があり、朝学校に着くなり先生に「すぐに家に帰れ！」と言われ、慌てて家に引き返し、家に着くなりものすごい音とともに泥流が流れてきたのだそう。浜に近いEさんの家でも半分土に埋まったということなので、山の手の被害は相当なものだったのではないだろうか。ちなみにEさんの姉、つまり長女も小学校卒業後、高等女学校に行けと言われたのだそうだが、彼女は何故か嫌がり、小学校で同級生だった福娘の娘の家に女中見習として自ら進んで行ったのだそう。

卒業後、東遊園地（現在の神戸市役所付近）にある中国合同電機本社の社長秘書として入社。昼休みは大丸から三越までの元町通りをぶらぶらするいわゆる「元ブラ」をして、ドイツ人夫婦の経営するユーハイムでケーキを食べたりするのが楽しみだったそう。男の人の秘書などもいたそうだが、特に男女差別を感じたことはなかったそう。しばらくして父親が日本造機の加古川支店に主任として転勤が決まり、家族で加古川に移ることになり、当時は加古川から元町へ汽車で通うなんていうことは無茶なことだったらしく、Eさんも退社し、加古川の兵庫県立農業学校で働くことになり、はじめは事務官として、女子部ができてからは助教諭として簿記などを教えていた頃に戦争が始まった。しかし農業学校だったのでお金や着物を渡せば野菜や米は手に入ったりしく、特に食べ物に困ったりしたこともなかったし、空襲にも遭わなかったのだが、広島原爆が落ちた後、電車で加古川にやってくる人も多かったらしい。そして学校の校長先生が、クリシチャンだったことを戦時中に知ることになる。終戦後、父親は土山で鉄工所を開き、高等女学校時代からかわいがってもらっていた恩師の家に遊びに行ったある日、先生の夫は日本通運の支店長として勤務していたのだが、Eさんが遊びにきていること

を知ると社員の一人を連れて家に帰ってきて、突然引き合わされたのだそう。そして「家の離れでお互いの家の話でもしていらっしゃい。」と言われ、仕方なく言われるままに従ったのだそう。翌日、尼崎教会の教会員だった先生夫婦に二人とも教会に連れて行かれて食事をみんなですて家に帰った。しかし正式な見合いでもなかったし、家に帰ってから親にも曖昧な形でしか話をせず、そのままやむやみに終わるかと思っていたらしい。ところが後日その社員を連れて先生の夫がついにEさんの家に現れ、Eさん一家は驚いて慌ててもてなし、Eさんの父親もその社員の実家のある十三に赴き、近所の人に聞き合わせに行き、好印象だったためにその足で社員の実家へ行き、結婚話がまとまったのだそう。Eさんの夫への第一印象は「おとなしそうな人やなあ。」だったそうだが、実際はかなりの亭主関白だったようである。結婚式は先生夫婦が南大阪教会に転会していたので南大阪教会で行われた。夫二十八歳、Eさん二十五歳だった。牧師夫婦はちょうどアメリカから帰ってきたばかりで、当時としては珍しいウェディングドレスを三着ほど持って帰ってきていたそうで、Eさんはそのうちの二着を借り、友達が白い靴の代わりに絹の布で足袋のようなものを作ってくれてそれを履いて式に出たのだそう。

結婚してからはじめは先生夫婦の離れで生活していた二人だったが、長男が生まれ、高校時代の友達に役所の人に紹介してもらい、引き上げ証明書を持っているなら入れる府営住宅があると言われ、夫は戦時中ジャワに行っていて持っていたので関目へ。そこで長女が生まれた。あまり引き上げ証明書を持っている人専用の府営住宅というのはいい顔されなかったそうで、友達からも進言され、高槻の府営住宅に引越し、昭和四十二年、突然夫は日本通運を退社、時計屋を開業するため高槻の明野町へと移ってくる。夫はかなりの亭主関白で、ご飯を自分より先に長男についだというだけで米を炊き直させたりする人だったのだそう。好き嫌いも激しくて

夫の食べないものは絶対に食卓に並べることを許さなかったらしい。手先の器用な人で、時計屋をするのには合っていたのだろうが、始めから商売気もなければ客対応も苦手な人だったからちっとも暮らしは良くならなかったとも言っていた。》

六

関祥子さんのレポートは、大正十四年四月に山口県で生まれた祖母の国吉（旧姓・村田）静代さんについてのものである。

《祖母は山口県油屋町の川尻という田舎の村で八人兄弟の上から二番目、長女として生まれた。川尻は本当に田舎だったと祖母は繰り返していた。父・村田助次郎は腕のいい漁師であった。（大洋漁業という会社に勤めていた。）彼は村でも評判の聡い人だったそうだ。実家は小さい畑を持っていて（その農地は山の中にあっただので「山田」と呼んでいたらしい）その土地に自分たちの食べる分だけのお米、麦、お茶などを作っていた。祖母は小学校までそこで過ごした。川尻で過ごした少女時代を幸せだったと言う。食べ物にも不自由しなかったそうだ。当時の好物はやはり甘いもので、中でも母が作ってくれた餅のまわりに餡ののかったものが好物であった。畑で採れたお茶も美味しかったそうだ。主食は、山田で育てたお米と麦を混ぜて炊いたものであった。

暮らしぶりは「上中下」でいうなれば「中」であつたらしい。家は屋根でできた家で、そのため冬は暖かく、夏は涼しく、わりと過ごしやすかったようだ。祖母の家の部屋は全部で六つあり、トイレは離れに、お風呂は五右衛門風呂があったそうだ。トイレは所謂「ぼットン便所」であり、祖母の祖母がそれを汲み上げ、畑の肥やしにしていた。五右衛門風呂はあるにはあるが、むろん毎日入っていたわけではない。何日おきに入っていたかは忘れたが、しかしそのため髪などには虱がわいていたそうだ。また、五右衛門風呂を焚くのは子どもたちの仕事だった。

着ているものは、母の作ってくれた木綿製の着物で、祖母は長女であったため、いつも一番新しいものを着ることができたと言う。ちなみに生理の時はゴムのついたパンツを母が薬局から買ってきてくれたそうだ。

少女時代の一番の楽しみは祭りで買った手まりで遊んだり、トンボを捕まえることだった。祭りとは年に一回、十月十日にお宮さんで行われるもので、百姓の家の男の子が太鼓を叩いたり、境内で神楽のようなものを踊ったりしていたそうだ。その他にも石切という遊びが流行っていたようだ。石切とは今で言う、ケンケンパ、のようなもので、地面にいくつかの円を描き、その上を片足でびよんぴよんと跳ねながら、その先にある石を取る遊びである。といっても、あまり遊んだ記憶は無いようだ。なにせ、八人兄弟の長女である。下に六人もいると子守が大変だったであろう。また、学校から帰ると、母に畑に来るように言われ、私の祖母はぶつぶつと文句を言いながらも畑仕事を手伝ったそうだ。夜は勉強していたのか尋ねると、していた気もするが、それ程沢山勉強した記憶は無い、と言っていた。

お正月は朝、餅をつき、お宮さんに参って、それから家に帰り雑煮を食べた。その後、小学校に行って挨拶をし、天皇皇后両陛下の写真に礼をし、紅白饅頭をもらって帰ったそうだ。その日は洋服を着ている子もいた。祖母は着物姿に袴であったようだ。

祖母の母は嫁に来たわけなので、勿論、姑と一緒に暮らしていた。ご飯を食べる場所が違ったり、膳が一品多かったり、という差は無かったようだが、仲が良かったのか、と聞くと、「そりゃ、今みたいな嫁と姑などという関係ではなかった」と話してくれた。母はよく働く人であったそうだ。ある日、母が病気をして寝込んだ時、姑は「まだ若いのに、何で寝てにゃならんのかね」と言い放ったそうだ。その時、母が泣きながら我慢していたことを強く覚えていて、と祖母は言った。たとえ、どんなに理不尽な事があっても、抗弁などは言語道断、それを

当然と受け止め、ただただ耐える他なかったのだ。

父は、その腕をかわれ、あちらこちらの会社の漁場にかり出されていた。そのため、毎日家にいた、というわけではなかったようだ。祖母のうちの父は、とても厳しく怖い人であった。父は自分が賢いため、子どもの成績を見ては怒鳴っていた。彼は成績表の中には甲しか許さず、乙が一つでもあると、それを「あひる」(乙の形があひるのようなので)と言っては叱ったそうだ。女子教育が尊重されなかった当時でも、そこは男女のわけ隔てなく叱られた、と言っていた。とにかく父は我儘であったらしい。自分の気に入らないことがあれば、容赦なくちゃぶ台をひっくり返した。機嫌が悪い時には怒鳴った。しかし、祖母の母は(勿論子どもたちも)それすらも我慢していた。父は恐ろしい人で、父の膝に抱かれたことはおろか、二人で会話を交わしたこともさえない記憶に無い、と言う。父と母が二人で外出したなんてことは論外であったようだ。今思い返してみても、父に対する良い思い出は何一つない、と言う。本当に我儘な人で、母が可哀相だった、と言っていた。

そうして祖母は小学校まで川尻で過ごした。当時、その後に進学することは滅多になかったのだが、祖母の小学校の先生が家まで来て、祖母に進学させることを薦めたそうだ。結果、祖母は同じ山口県内にある高等商業学校に進学することになった。そのため、親元から離れて下宿するようになった。祖母が下宿した先の旦那さんは、学校の先生であった。奥さんからはよくしてもらったみたいだ。そこでは午後九時には消灯され、それ以降は蠟燭を使い勉強をしていた。部屋は二人部屋であった。学校の休みの日曜などは、掃除・洗濯をしていた。

当時の女学生には映画を見に行ったり踊りを見に行くことが固く禁じられていた。しかし、祖母の友達などは、内緒で見に行っては帰ってきていろいろと報告してくれていたそうだ。そのため、祖母もそれらに対する羨望が日増しに強くなっていった。そこでとうとうある日、友

達と踊りを見に行った。そしてそれが旦那さんの知るところとなり、こっぴどく叱られたそうだ。

学校の授業では英語を習ったと聞き、大変驚いた。商業英語や英作文がその主であったらしい。その他、商業学校であったため、簿記や経理の計算等も習った。しかし、もっと勉強しておけばよかった、と祖母は言っていた。また戦争中だったので、竹やりの訓練などもしたらしい。ただ、女子教育は無用だとされていた当時にとって、祖母の学歴は珍しい方なのだ、と母から言われた。

学校を卒業後、(祖母にとっての)母方の祖母がいた大連の満州鉄道会社に勤めた。大連は日本の植民地下であったため、言葉は日本語で大丈夫だった。そこでは日本人が「上」、中国人が「下」というはっきりとした上下関係があったそうだ。また、会社でも男女差別があった。とにかく女性の給料が安かった、と言っていた。女性は朝早く出勤し、会社の掃除をするのが日課であり、男性職員へのお茶くみなども当然とされていた。

その後、終戦になり、一九五二年三月三十日に帰国した祖母は、その翌年、父の会社の人とお見合いをした。そして結婚したという。

七

鳥居裕子さんのレポートは、昭和三年一月に静岡県静岡市新富町で生まれた祖母の鳥居恵美さんについてのものである。

新富町は、当時は下町で職人が多い所であったという。家族は、父、母、七人姉妹で、恵美さんは五女だった。

《祖母のお父さんは、陶器屋に勤めていた。今でいうと、サラリーマンやセールスマンのようなもので、お店で注文をとって、販売するという仕事をしていて、自分の店ではなく、大きな店に販売員として勤めていた。

お母さんは、主婦。家事の合間、時間がある時には裁縫、仕立て、また静岡はお茶が盛んなため、棒茶拾いなどをしていて。

この時代は、どの家も子供が多く、また現代のように発達した道具などもなかったため、家事だけしかする余裕がなかった。仕事なんてやっている暇がなかった。それが当たり前だったという。》

学校は、まず尋常小学校に六年間通った。その時の思い出は《今と比べて一番違うのは、修身の授業が多かった事だという。常識的なことや、心の勉強をする事が多かったという。

服装は、小学校に制服はなかった。祖母は、スカートと、上はセーラー服のようなものを着ていた。生徒の中には着物を着ている子もいた。お金さえあれば服は買えたが、祖母の家は生活が大変だったため、ほとんど上の姉妹のお下がり。大切に着て、なるべく長持ちさせるように、学校から帰ったらまずすぐに脱いで、家の中ではもっと簡単なものを着た。袖やひじの部分はすぐにすれてしまったり、破れてしまったりしたので、その時にはそこだけを付け替えて何度も使っていた。新しいものを買ってもらったことはほとんどなく、お正月などの時に、やっと下着を買ってもらえたくらいだという。

給食はなく毎日お弁当。ごはんのにりだけ、またはごはんに梅干だけが普通。ちょっと豪華になると、夕飯の残り物で煮豆や芋を入れてもらえた。家でのご飯は、朝は麦入りご飯に味噌汁、漬物。昼に家にいる時には、朝と一緒のメニュー。夜は、朝のメニューにジャガイモやたまねぎの煮物が入ったりした。肉は月に一回食べられるか食べられないくらい。肉といってもダシ肉のようなものであった。てんぷらやカレーなども月に一回程度でとても特別に感じた。》

卒業後は私立の女子商業に三年間通った。この女子商業という学校は、これからは女性も職をつけていくべきだという考えに基づいて創られた学校であったという。

《この学校は私立の学校であるため、ある程度お金がないと通うことが出来なかった。祖母が入った理由は、私の祖母は尋常小学校の時、勉強ができたそうで、尋常小学校だけで終わる

のはもったいないということで、先生が推薦してくれて入ることにしたという。家族も大変ではあったがそれに協力してくれて、お金を出してくれたという。姉妹のなかで尋常小学校よりも上に行ったのは私の祖母だけであったそう。

学費は大体、月に五円五十銭。奨学金制度のようなものはあったであろうが、祖母はもらわなかったので、家族が頑張ってお金を出してくれたという。

町中の裕福な家の子は、尋常小学校を出た後には、尋常高等科という学校に行った。二年間。ここに行くにはもちろんお金がないと行けないし、勉強もよほどできないと行けなかったそう。祖母は、下町の職人町に住んでいたため、お金に余裕がなく、行きたくてもいけなかった。

服装は、制服があった。セーラー服。》

普通だと四、五年かかるころを、家が豊かでないということから三年で詰め込んで終わらせてもらい、昭和十八年に女子商業を卒業した恵美さんは、すぐに神奈川県川崎市にある芝浦（今の東芝の前身）という軍需工場に入り、住み込みで寮生活を送る事になった。

会社は軍需品の製造業で、主に飛行機や船の部品を造っていたという。

《仕事内容は、祖母はそろばんができて、数学も得意であったため、給与科で社員の給料を専門に計算する仕事を担当していた。電卓などはないから、そろばんのみを使って計算していた。給与科には大体六十人くらいいて、一人で二百人分くらいを担当していたそう。》

軍需工場での生活は《労働時間はしっかりと決まっていた、時間通りに始まって、時間が来れば終わる、きっちりしていた。休日もしっかりあって、まだ空襲が激しくない時には、東京へ買い物に行ったこともあった。

食事は三食しっかりと付いていた。それでも今考えたら質素なもの。ご飯におかず一品。漬物、ちょっとした煮物、かぼちゃのつる、さつまいもなど。軍需工場であったため、とにかく働かないと困る、ということでお腹いっぱい食べさせてもらえたという。戦争がひどくなっ

てからは配給も減るため、ご飯をおかゆにしてそれにうどん粉や芋を入れて食べた。

お風呂は、毎日入れた。共同風呂であった。しかし、空襲が激しくなってからは全然入れなかった。

服装は下はもんぺ、上は会社指定の上着。仕事以外のときに着る私服は四、五枚程度の服を大事に使っていた。当時、「闇」といって、法外の値段で布生地を売る人たちがいた。それを米などと交換して買うのだが、工場の女の子で、どうしてもおしゃれをしたい子達は、自分が働いたお金を二、三ヶ月もためてその布を買い、自分で服を作ったりしていたという。》

生理の際は《本当に大変で、毎月生理がくるのがいやだったといっていた。祖母は、皆よりも生理が始まるのがおそく、初めてなったのは、軍需工場で働き始めた頃。今のようなナプキンや生理用のショーツは一切なく、脱脂綿を使っていた。軍需工場へ行く時に、祖母のお母さんが配給で配られたのを少しずつためていてくれて、それを持たせてくれたことが印象的だったという。脱脂綿は、本来は一回で捨てるものだろうが、そう簡単に手に入るものでもなかったため、使えるだけ何度も使ったという。それでも、三回ほど使うと、薄くなり、ぼろぼろになって染みてしまうから、その時には下に紙や布をあてた。当時は生理の話をするのがタブーだったらしく、友達と話す事などあまりなかったという。だから、洗った脱脂綿を干すのが恥ずかしく、人目を避けるためにトイレの中にこっそりと隠して干したこともあったという。トイレの紙は、質が悪く、時には雑誌や新聞紙を使っていた事も。トイレはとにかく不衛生で、病気になってしまう子もいた。また、栄養の偏り、発育不良などにより生理はあまり量はひどくなかったらしい。空襲が激しくなって精神的にきつくなり、栄養ある食事が十分にできないために、生理がこなくなってしまうことが多かったという。》

昭和二十年、空襲がひどいため会社も経営していくことが出来ず、静岡に戻るようになった。

結婚は、お見合い結婚で、二十三歳の時だった。《親同士ですべて決めてしまうようなお見合いではなく、仲人さんがいて、良いだろうということでお互い紹介されて知り合った。知り合った後は、映画を観に行ったり、喫茶店でお茶をしたりと何度かデートをした。お互い仕事が忙しかったため、デートといっても月に一回程度であった。私の祖父（鳥居家）の方も雑用をしたり、仕事を手伝ってくれたりする人がほしく、祖母の方も仕事をしたかったので、お互い必要としていた立場でちょうど意見が合ったため結婚を決めたという。やはり戦後であったから、それほど厳しくもなくデートなどをする事が出来たのであろう。しかし恋愛よりも仕事が最優先であったという。》

子供は、男三人、女一人。《二十四歳の時に一人目を産む。この当時は四人～六人が普通だった。この時代でも、体の弱かった人を除いては、一人っ子という人は珍しかったという。子供は神からのさずかり物だから、現代のように人工的に子供の数を決めたりするような事は何もなかったから、できたらありがたいと思いそれだけ産んだ、といっていた。》

八

川端史子さんのレポートは、昭和三年三月に大阪府で生まれた祖母の川端（旧姓・中西）弘子さんについてのものである。

《家は農家兼八百屋で貧乏だった。八百屋は、店を持たず車を引いて回っていた。四人兄弟の次女。姉と妹、弟がいる。他に兄と弟がいたが幼いときに亡くなる。実父母と祖父、祖母と同居していた。家で一番偉いのは祖父だった。地元の草相撲取りで、体格もよく、一日六回も酒を飲む酒豪だった。豪快で人のいい人間で、弟を非常にかわいがっていた。父は養子で、大人しくやさしい人だった。体格も華奢で、しかし毎日一人で車を引いて野菜を売っていた。ところが大変モテたそうで、遊び好きだったらしい。そして遊び上手でもあったという。おしゃれでもあった。母は、人のいい元気な人で、父が大

人しいためか他所のお母さんより自由にしていた。仕事はせず、家にずっといて家事をしていた。朝は早く起きてご飯の用意をし、父が出かけると洗濯、余った時間には針仕事をしていた。裁縫は生徒を一人取って教えていた。終戦後は商店街に店を持ち、母もそこへ通うようになったので、家事は自分と祖父がするようになる。家事は祖父に教わったというから、当時としては珍しい家だったようだ。姉は勝気な美人でおばあちゃん子だった。弟はおじいちゃん子で、妹は末っ子なのでお母さん子。弘子は自然とお父さん子になった。ご飯の時はいつも父の膝にのせてもらった。優しい父が大好きだったという。家の中では世間であるような厳しい男女差別はなかったそうだ。

服装は洋服で、姉のお下がりがばかりだった。スカートにセーターといった今と変わらない服を着ていた。着物は寒いとき用であった。母は着物を着ていた。面白いことに、終戦近くになると、お金持ちの人が着物を持って食料と交換しに来たそうだ。お金持ちは着物があっても食物がなく、百姓は食物があっても着物がなかったから物々交換が成立したらしい。百姓は花嫁衣裳も米と交換で手に入れたというから、今と違って農家は強かったのだろう。

尋常小学校四年のときに祖母が他界。六年のときに養子の話がきた。当時様々な目的で、養子は多かったそうだ。弘子の所に話を持ってきたのは資産家のおばあさんで、甥の嫁候補として養女を探していたそうだが、当初その話は弘子には伝えられなかった。家にいたのでは到底行けないと諦めていた高等女学校へ行かせてくれるというので弘子はすぐに話を決めた。資産家ということで、多少、裕福な生活への期待もあったらしい。「お嬢さん」になれると思った。当時高等女学校に行ける人は「お嬢さん」だった。しかし、裕福どころか家事手伝いをすべてやらされ、学校から帰ると寝る暇もなく働かされ、家にいるよりこき使われた。すごいケチでお手伝いさんは男性が一人いるだけだったので、ご飯炊きから裁縫、洗濯、養母の世話もすべて

一人でしなければならなかった。養母が、弘子の婿にと思っていたその甥は軍人学校にいて会うことができなかったで、その養母に言われて一度だけ手紙を出した。しかし何も知らない相手に書くこともなくて困っていたら、養母が文章を全部考えて、自分はそれを丸写ししただけだった。返事も来たそうだ。もちろん結婚の話は聞かされず、「お兄ちゃん」と呼ばれていた。顔も知らない人との結婚話が持ち上がっているなんて思わなかったそうだ。約束どおり樟蔭東女学校へ入学したが、厳しい生活を強いられていたため帰るのがいやで、学校が終わると毎日実家へ寄っていた。しかし、自分で行くと言ったから帰りたいとは言えなかった。二年経った時、父が見かねて帰って来てもいいよと言ってくれたので、喜んで帰った。お金も養家へ返してくれた。そして女学校を中途退学したのが十四歳のとき。それからすぐに住友本社にエレベーターガールとして就職した。コネがあったらしい。仕事としては勿論良い方で、初任給が三十二円だった。ボーナスは八十円くらい。給料は全て家に渡し、ずっと小遣いももらっていた。姉も松坂屋百貨店に就職していて生活は楽になっていたようだった。お弁当に白ご飯を持って行くのが恥ずかしくて、よく交換してあげたそうだ。みんな芋などを持ってきていた時のことだ。十六歳のときに近くの大百姓の息子と知り合い、今でいえば「付き合う」ようになったが、そのときにはもう親が、いところの結婚を決めていた。恋人がいることを弘子は両親には言わなかったが、母は気付いていたかもしれないそうだ。いとこの嘉一も知っていて、彼の両親にそれとなく断ってくれていたそうだ。ところがその恋人が徴兵で満州に送られ、嘉一もまた自ら志願して駆逐艦「雪風」に乗って南方侵略へ行った。恋人は行く時日記帳を二冊くれたという。

昭和二十年三月に大阪空襲があって、焼け野原を見て怖くなり、会社をやめた。その後は家事手伝いをしていた。その間に小学校の先生をしている人から結婚の申し込みもあったが断っ

たという。昭和二十年八月に終戦。運良く船の沈まなかった嘉一はすぐに帰ってきたが、恋人は三年経ってからようやく帰ってきた。栄養失調で、すぐには会えなかった。暫くして見舞いにいくと、あまりに重症で驚いたそう。栄養失調なんてすぐに治ると思っていたのが大間違いだった。おそらく何も食べずに帰って来たのだろう。見舞いにいって数日後に亡くなった。

結局、昭和二十四年二十一歳で三歳年上のいとこ嘉一と結婚する。結婚のことはすべて両親が決めた。嘉一は、弘子の父の兄の子で、子どもの頃から知っている。実家は土地持ちの百姓の家である。貧乏だった。九人兄弟の末っ子である。こちらの家はかなり男女差別が激しかったそう。たまたま弘子が家族で訪ねて行っても相手にされるのは祖父と父だけで、女性陣はいつも板の間に通された。ご飯も男性とは一緒に食べなかった。優しい父からは想像の出来ない家だったそう。結婚するとき弘子は両親から服など持たせてくれたが、嘉一のほうは兄弟が多くて何ももらえなかった。二人で旅行したのはこのときの新婚旅行だけだった。

結婚後の生活は苦しかった。神崎産業に勤める嘉一の給料は八千円。会社はいいところだが、最初から独立するという話で雇われていたため安い給料だった。服も買えなかったので夫は弘子の父から一番いいスーツを借りて出勤したそう。ただ、両方の実家が農家なので米だけは不自由しなかった。近所の家の二階を間借りしていた。男の面子に関わるという、外には出してもらえなかったため、弘子は着物の仕立ての内職をして家計を助けた。以前、住友を退職後に家事の間に仕立てを習いに行っていたのが役に立った。今でも小遣い稼ぎにたまにこの内職をすることがある。自分は着物なんて着なかったのに、すごいものである。

昭和二十六年、二十三歳の時長女が生まれる。昭和二十八年に長男誕生。夫は息子に大変厳しく、娘には甘かった。だから弘子は息子を可愛がってやるようにした。しかし息子が高校受験の時には夫が懇談なんかに行くくせに、娘のと

きは何の興味もないようで弘子が行った。後に娘に少々恨み言を言われたそう。昭和三十一年、神武景気の波に乗り夫が独立し会社を作る。貸し店舗だった。日本製工の代理店だった。同時に実家の父が一戸建ての家を買ってくれた。会社を辞めるのも独立するのも夫がすべて自分で決め、弘子には報告するだけだった。腹は立ったが何も言ったことはなかった。景気もよく、会社も上手くいって従業員も増えた。弘子も工場を手伝っていたので、家事と育児と仕事をこなさなければならなかった。しかし、その頃には所謂三種の神器を買う余裕もあり、昔のように大変なこともなかった。もちろん夫が家事を手伝うことなどなかったが、それが当たり前だった。頭が固くて、外に愛人を作るなどということとはなかったが、突然パチンコにハマリ、毎日終電で帰ってくるようになった。しばらくは黙っていたが本当に毎日そうなので、子ども達と顔を会わせない日が続いた。それである日、「そのうち子どもに『どこの人?』って言われるようになるで。」といったら早く帰ってくるようになったそう。

九

森寛恵さんのレポートは、昭和八年九月に兵庫県多紀郡北河地村で生まれたFさんについてのものである。

《家族には兄と弟がいました。家の職業は兼業農家です。農業のほかに、特に父親は炭焼屋を、母親はお蚕さんをしていたそうです。炭焼屋さんとは、一メートル五十センチほどのおおきな釜に檜の木を隙間なく敷き詰め、練った土で入り口を五十センチほどだけ残して蓋をします。そして開けているところから火をつけ、全体に火が回ったら完全に蓋をします。木がしっかり中まで燃えたら煙突の方にも蓋をし、一週間熟成させて完成するのです。蓋をするのがいつ頃かは煙突から出る煙で判断します。燃え始めは黒色と白色の煙なのですが、全体に火が回るころには煙が青色になるのでそれを合図に入り口を閉じます。そして、その青い煙が少なく

なっところに煙突にも蓋をします。煙突に蓋をするタイミングはいい炭ができるかどうかの瀬戸際なので、その時は夜になろうかご飯時だろうが家に帰らず煙をじっと見つめつづけてタイミングをはかっていたそうです。買う人は暖房のためとか食べ物を作るために一般の人が、あと料亭の人も買っていったそうです。

母親は、工場から教わったのではなく母親の母親に学んでお蚕さんをしていたそうです。

網戸のようなものの上に蚕を飼って、桑の葉を与えて育てたそうです。最初はそんなにスペースをとらないのですが、大きくなるとそれこそ家一面に蚕があふれたそうです。大きくなった蚕は繭を作りはじめます。繭のまま出荷することもあるけれど、そこから糸を自分で作ってから出荷すること多いそうです。繭をゆで、桑の葉でさっとかきまぜるとこんがらがった繭が解けて、そこから一本の糸をとりだし、同じ大さの糸を作り上げて行くそうです。蚕が茶色いさなぎになると、必要な分だけ残しておき、あとは肥料としたそうです。余談ですが桑の木には紫色の実（ほなめという）がなり、それがとても美味しいのでFさんの好物のオヤツだったそうです。

そうしてできた石炭や糸を荷車につめて、先頭に親が、子どもは後ろから押して何十キロ離れた場所に売りにいったそうです。

Fさんは中学まで進学したのですが、中学ではテストもなく、校庭はすべてサツマイモとかが植えられており、現在のような机上の勉強は三年生のころにすこしあっただけのようです。困ったのは学校のあまりの遠さです。小学校は近かったのですが、中学校は五、六キロの距離があったそうです。どのくらい遠いかと言うと、朝母親に作ってもらった藁草履が、家に帰る時にはいつも破れてしまうほどだそうです。だから母親は毎日毎日娘のために藁草履を編んでくれたそうです。冬で、雪が降ったらさらに大変です。藁靴を編んでくれる時も時々あったけれど、それは手間がかかるのであまりしてくれず、ほとんど雪が積もろうかどしゃ降りの雨が降ろ

うが藁草履で五キロの距離を歩いたそうです。

Fさんは中学を卒業したあと二年間女中をしていたそうです。炊事、洗濯などで、泊りがけでやっていたそうですが、そのあたりは詳しく話してくれませんでした。ただ、Fさんが女中をしていたころにはもう固形の洗剤があったそうなのですが、洗剤がなかったころはネムの木や、灰で洗濯物を洗っていたそうです。女中をやめてから、家に帰ると結婚の話が何回も来たのだけれど、二十歳までずっと拒み続けたそうです。二十歳のころにきた見合い話で、「この結婚も断るなら俺はお前から手をひく」と父親に言われてしかたなく結婚したそうです。夫は十人兄弟で、しかも夫の父親は早くに亡くなってしまったので夫の母親は女手一つで十人の兄弟の面倒を見たそうです。Fさんが嫁いだ頃は一番上のお姉さんは嫁に、二番目のお兄さんは病死し、三番目のお兄さんは戦死し、四番目のお姉さんは病死し、五番目のお兄さんは会社員となって所帯を持ち、六番目が夫で、七番目の弟は大阪に行って就職し、八番目の弟は大学までいき、（そのころ、大学に行けたのは村で四、五人くらいなもののだそうです）九番目の妹と十番目の妹は一緒に住むという状態でした。夫は駅員さんの職業で、一週間に一度しか帰らなかったそうです。夫は毎月二万ちょっとの給料をもらい、そのうち五千円を、今まで女一人で大変だったからこれからは楽をしてくれと母親にやり、妹二人にお小遣いとして三千円づつあげ、大学に行っている八番目の弟の学費やその他の工面までしていたそうです。そのうえ夫は駅の偉いかたを家に呼び新年会や松茸刈りをしたりしていたそうです。だからお金に困ってしまったFさんは二十一で娘、二十四歳で息子、さらに二十七歳で息子を産んだあと、子どものことは夫の母親にまかせて働きにでたそうです。鉱山でとれた石を、煉瓦にできる石とできない石とに分別する仕事だそうです。流れてくる石の一番近くに新米の人がいて、遠くなっていくごとにベテランの人になっていくシステムだそうです。しかし、農業やその他のやつで

そっちのほうがお金が儲かりそうだったりすると仕事は休んでそっちをしたそうです。夫の母親は夫から貰ったお金で温泉旅行に出かけたりして、あまり何も語ってくれなかったけれど、嫁いじめはあったそうです。

世界大戦があったころ、Fさんはまだ幼かったのですが、田舎だったので敵の飛行機が飛んでいるのを見かけるくらいのもので、爆弾は投下されたことはないそうです。水には恵まれた地域なので食料難などは全くなく、さつまいもの蔓なども食べましたがそれは食べ物じゃなかったからではなく食べられるものだからだそうです。防空頭巾もあったし防空壕もあったそうですが、頭巾などは「暖かいから冬には重宝した。」と言っていました。

煎餅の箱のようなものに飴が敷き詰めてあって、それを箸でとってなめたとか、じゃこう売りという商売人が来たときは袋いっぱいじゃこうを買って、オヤツにぼりぼりと食べていたそうです。魚は川魚がいたし、鶏を飼ってもしたけれど、Fさんは鶏をさばく様子を見てかしわ嫌いになり、魚も鶏の肉も嫌いだからと言って食べなかったそうです。

女性差別は、やはりあったそうです。しかし基本的に男も女も働かなければ生計が立てられなかったのも、そんなにひどいのはなかったそうですが、「でしゃばる女はよくない」とかよく言い聞かされたそうです。役所につけるのも男の人だけだし、意見を言うときだって男の人の意見を優先されるそうです。あと、朝礼の時には男の子が前列に並んで、その後ろに女の子が並んだそうです。Fさんは石の仕事はやめてから、ゴルフのキャディーをしていたそうです。

それも定年になったのでやめ、現在は農業に専念しています。》

お わ り に

今回、御紹介できたのは、集まった証言の中のごく一部に過ぎない。

インタビューをした学生の感想の中で目立ったものは、「おばあちゃんは、女性差別はなかったと話していた。実際には差別があっても当時はそれが当たり前だと思われていたので差別とは感じなかったのだろう。自分たちが当たり前だと思っている事でも、後世から見たら差別に当たる事が沢山あるかも知れない。」「これまでおばあちゃんとしてしか見ていなかった相手にも、子供時代や若い時があったのだという当たり前の事に今更ながら気が付いた。おばあちゃんが、一人の人間として見えてきた。」というものであった。いずれも貴重な気づきであると思う。また、多くの学生がおばあちゃんと話をすることで、困難な時代を生き抜いてきたパワーに打たれ、強く励ましを受けたと言う事も御報告しておきたい。

私は、同志社女子大学内に、様々な困難に満ちた女性の人生をまるごとサポートする女性センターの設置を強く希望している。女性特有の困難をサポートしてこそ女子大学の存在意義があると考えからである。そしてその中に、こうした人生の先輩の聞き書きをまとめたコーナーや、先輩自身が人生を書き綴った自分史コーナーの設置を夢見ている。今回の試みは、その為のささやかな第一歩のつもりでもある。志を同じくする方の御支援・御協力を賜りたいと思う。